

『医心方』以前の『本草和名』や『和名抄』には『神農食經』が引用されている。したがって十世紀頃の日本に本書が伝存していたことは確実と言えよう。そしてその類似文が『千金方』や『金匱要略』に見られることから、本書が唐代前の「食經」書に由来するであろうことも推測できる。本書と『神農黄帝食禁』との関連については、単に書名の類似だけでなく、今後より広範な文献の比較考察が必要と思われる。

注(1) 江戸医学覆刻半井本『医心方』(一九七三 日本古医学資料センター影印)による。

(2) 29—13 bは卷二十九第十三丁裏のこと。以下同。

(3) 『重修政和經史証類備用本草』(一九八二 人民衛生出版社影印晦明軒本)による。

(4) 中医研究院影鈔元刻『新編金匱方論』(北里東医研蔵)による。

(5) 江戸医学覆刻宋本『備急千金要方』(一九八二 人民衛生出版社影印)による。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)

『医心方』の伝写について(V)

錦小路家と榎田家

杉立義一

昭和五十九年十月十日、医心方撰進一千年記念碑除幕および記念式典が京都市において行われたが、その際、丹波氏の正統であり唯一の堂上公卿であった錦小路家とその分家である榎田家の御当主も出席されて、数々の史料を「日本の医学一千年展」に出品していただいた。

一、錦小路家、同家系譜に次の記述がある。

錦小路家、頼庸為頼季嫡子相続小森家被補侍中頼季老後生頼方頼方成長仍申 朝家令頼方為相続小森家於頼庸者可給別称号旨宝永四四廿九可称錦小路之旨以益光被 仰下享保十一年十一月頼方死無子仍举大中臣時亮令続小森家早恐至後世有嫡庶論仍又申 朝家丹波盛直卿丹波頼直卿相並天文之比退仕 朝家頼直以後子令相続小森家是也盛直以無後断絶早頼庸可令相続盛直以後旨享保十一

年十二月廿七日頼庸可令相統盛直以之後旨被 仰下阜

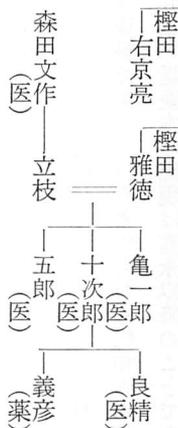
1 頼庸—尚秀—頼尚—頼理—頼易—頼徳—頼言—在明—
9 頼孝—頼昭

頼庸から頼理までは典薬頭に任ぜられ、享保二十年堂上に列せられた。頼徳は七卿落の一人で元治元年長門で没した。頼言は明治元年四月官許を得て、烏丸一条下ル東側の施薬院三雲宗順邸に御所の内病院を開設した。頼庸・頼尚・頼理・頼易・頼徳の墓は、光雲寺墓地（京都市左京区南禅寺北ノ坊町）にある。尚秀と各代女人方の墓は妙蓮寺玉竜院墓地（京都市上京区寺ノ内通大宮東入）にある。

二、榎田家

榎田家は頼徳の弟雅徳にはじまる。雅徳は大和の法隆寺西園院の住職になったが、還俗に際して叔父榎田右京亮（華頂宮諸大夫）の姓をもらい榎田と名のつた。東京に移つてからは千住大区長となった。

錦小路頼理—頼易—頼徳—頼言—



三、錦小路家史料

かつて山崎佐は錦小路家文書について、日本医史学雑誌に報告した。今回同家より次の史料を出品していただいた。

- 1 丹波氏系図
- 2 系譜
- 3 丹波氏仁和寺古記録写
- 4 丹家医官補任
- 5 天保七年、侍医申望雜記（五ノ下）
- 6 錦小路家雜録
- 7 太真丸蛍光丸方剂書
- 8 「丹波家製菓」印鑑一ケ
- 9 さらに別の機会に次の史料を拝見した。
錦小路家系譜

10 中務在官一条雜記、弘化二年十一月

11 丹波氏系譜二種

文献

一 山崎佐、「錦小路文書」、(1)(2)(3)、日本医史学雑誌、6(2)

昭31・6(4)昭31・9(2)昭33

一 山崎佐、「江戸幕府時代における朝廷の医療制度」、日本医史学雑誌、7(4)昭32

一 山田重正『典医の歴史』、昭55

一 岡田靖雄・榎田五郎「ある社会精神医学者の肖像」、臨床精神医学13(6)、一九八四

一 『公卿辞典』、坂本武雄、昭56

(京都府医師会)

『医心方』卷二・四の異本群

について

小曾戸 洋

現伝の『医心方』のテキストには、半井本・仁和寺本・延慶本などの系統が知られるが、このほか卷二・四に関しては別系の異本が存在する。すなわち、(1)江戸初期写本(北里東医研医史研所蔵)、(2)寛政写本(内閣文庫所蔵本のうち)、(3)宝暦写本(石原明氏旧蔵)である。『医心方』は書誌学的にも今後さらに究明の必要な書であるが、ことにこの卷二・四零本についての報告は皆無である。よってここにその初歩的検討を行ったので報告する。

〈1〉江戸初期写本(以下、江戸初本と略称)

本写本は最近、古書の入札会に出現し、私どもの研究室の蔵に帰した新資料である。いうまでもなく仁和寺本の発見は寛政、半井本・延慶本の出現は嘉永以降のことであるから、それ以前、とりわけ江戸初期の写本ということ自